

5/13 Sat.

第257回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No.257 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

5/14 Sun.

第257回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No.257 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Conductor
ヴァイオリン
Violin
コンサートマスター
Concertmaster

エルガー
ELGAR

[休憩]
[Intermission]

ワーグナー
WAGNER

R. シュトラウス
R. STRAUSS

沖澤のどか -p.5
NODOKA OKISAWA

三浦文彰 -p.8
FUMIAKI MIURA

林 悠介
YUSUKE HAYASHI

ヴァイオリン協奏曲 口短調 作品61 [約48分] -p.11
Violin Concerto in B minor, op. 61
I. Allegro
II. Andante
III. Allegro molto

楽劇〈トリスタンとイゾルデ〉前奏曲 [約12分] -p.12
"Tristan und Isolde" Prelude

交響詩〈死と変容〉 作品24 [約23分] -p.13
Tod und Verklärung, op. 24

※ワーグナー：楽劇〈トリスタンとイゾルデ〉前奏曲とR. シュトラウス：
交響詩〈死と変容〉は、切れ目なく続けて演奏します。

5/19 Fri.

第662回 名曲シリーズ
サントリーホール 19時開演
POPULAR SERIES No.662 / Suntory Hall 19:00

5/21 Sun.

第126回 横浜マチネーシリーズ
横浜みなとみらいホール 14時開演
YOKOHAMA MATINÉE SERIES No.126 / Yokohama Minato Mirai Hall 14:00

指揮
Associate Conductor & Creative Partner
ピアノ
Piano
コンサートマスター
Concertmaster

モーツァルト
MOZART

カミロ
CAMILO

[休憩]
[Intermission]

モーツァルト
MOZART

ラヴェル
RAVEL

鈴木優人 (指揮者/クリエイティブ・パートナー) -p.6
MASATO SUZUKI

ミシェル・カミロ -p.8
MICHEL CAMILO

長原幸太
KOTA NAGAHARA

歌劇〈ドン・ジョヴァンニ〉序曲 [約7分] -p.14
"Don Giovanni" Overture

ピアノ協奏曲 第2番〈テネリフェ〉
(アウデイトリオ・デ・テネリフェ委嘱/日本初演) [約27分] -p.15
Concerto for Piano and Orchestra No. 2 "Tenerife"
(Commissioned by the Tenerife Auditorium; Japan Premiere)
I. Maestoso, Allegro Deciso, Moderato, Vivace, Maestoso, Vivo
II. Largo
III. Allegro Alla Danza
© 2008 Michel Camilo - Redondo Music (BMI-SGAE). All Rights Reserved.

交響曲 第28番 八長調 K.200 [約23分] -p.17
Symphony No. 28 in C major, K. 200
I. Allegro spiritoso
II. Andante
III. Menuetto : Allegretto
IV. Presto

ボレロ [約13分] -p.18
Boléro

5/31 Wed.

第628回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No.628 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor
ピアノ
Piano
コンサートマスター
Concertmaster

シベリウス
SIBELIUS

シューマン
SCHUMANN

[休憩]
[Intermission]

ニールセン
NIELSEN

上岡敏之 -p.7
TOSHIYUKI KAMIOKA
エリソ・ヴィルサラゼ -p.9
ELISSO VIRSALADZE
長原幸太
KOTA NAGAHARA

交響詩〈エン・サガ〉作品9 [約20分] -p.20
En saga op. 9

ピアノ協奏曲 イ短調 作品54 [約31分] -p.21
Piano Concerto in A minor, op.54
I. Allegro affettuoso
II. Intermezzo: Andantino grazioso
III. Allegro vivace

交響曲 第5番 作品50 [約34分] -p.22
Symphony No. 5, op. 50
I. Tempo giusto - Adagio
II. Allegro - Andante

指揮
沖澤のどか
NODOKA OKISAWA, Conductor

新鋭・沖澤が描く
胸に迫る熱いドラマ



©読響

瑞々しくイマジネーション豊かな音楽を引き出し、欧州で注目を浴びる新鋭・沖澤のどか。得意のドイツものから、ワーグナーとR. シュトラウスの二つの名曲を休みなく続けて指揮し、気宇壮大な世界を描き出す。

青森県生まれ。幼少期からピアノ、チェロ、オーボエを学ぶ。東京芸術大学卒業および同大学院修士課程修了。その後、ハンス・アイスラー音楽大学ベルリンの修士課程修了。第18回東京国際音楽コンクール [指揮] にて第1位および特別賞、齋藤秀雄賞を受賞。2019年にはブザンソン国際コンクールで優勝し、一躍注目を浴びる。これまでミュンヘン響、ベルリン・コンツェルトハウス管、メルボルン響、マゲデブルク・フィル、ブランデンブルク響、ニース・フィルなどに客演。オペラの分野でも活動を広げており、20年には東京二期会オペラ〈メリー・ウィドウ〉を、22年にはセイジ・オザワ松本フェスティバルで歌劇〈フィガロの結婚〉を振り絶賛された。20～22年にはベルリン・フィルのK. ペトレンコのアシスタントを務め、昨年ペトレンコの代役として同フィルを指揮して話題を集めた。22年からミュンヘン響のアーティスト・イン・レジデンスを務め、23年4月京都市響の常任指揮者に就任。

指揮を田中良和、松尾葉子、高関健、尾高忠明、C. エーヴァルト、H.D. バウム、M. ナヴリに師事。井上道義、下野竜也、N. ヤルヴィ、P. ヤルヴィ、K. マズアらのマスタークラスを受講したほか、19年には東京・春・音楽祭のムーティによるイタリア・オペラ・アカデミーに選抜された。渡邊暁雄音楽基金音楽賞、齋藤秀雄メモリアル基金賞を受賞。ベルリン在住。

5/13
土曜マチネー

5/14
日曜マチネー

Maestro

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
文化庁 独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：アフラック生命保険株式会社

5/19
名曲

5/21
横浜マチナー

Maestro

指揮

鈴木優人

(指揮者／クリエイティブ・パートナー)

MASATO SUZUKI,
Associate Conductor & Creative Partner

気鋭マサトのボレロ
熱狂のクライマックス



©読響

音楽界の未来を切り開く革命児・鈴木優人が、ラヴェルの〈ボレロ〉で生き生きとしたリズムを生みだし、興奮のクライマックスへと導く。

1981年オランダ生まれ。東京芸術大学卒業および同大学院修了。オランダ・ハーグ王立音楽院修了。指揮者として国内外のオーケストラと共演するほか、鍵盤楽器奏者としても活躍している。音楽監督を務めるアンサンブル・ジェネシスでは、オリジナル楽器でバロックから現代音楽まで意欲的なプログラムを展開している。

2018年にバッハ・コレギウム・ジャパン (BCJ) の首席指揮者に就任。BCJオペラシリーズのプロデューサーを務め、20年のヘンデル〈リナルド〉は、バロック・オペラの新機軸として高く評価された。また、19年から世界的ヴィオラ奏者タメスティとの「バッハ・プロジェクト」を開始し、ヴェルビエ音楽祭などに出演。22年4月にはドイツ・ハンブルク響に、23年3～4月には名門オランダ・バッハ協会に客演し、J.S. バッハ〈マタイ受難曲〉(全13公演)を指揮した。

作曲家としても活躍するほか、13年から調布国際音楽祭のエグゼクティブ・プロデューサーを務めるなど、活動は多岐にわたる。NHK-FM「古楽の楽しみ」に出演中。芸術選奨文部科学大臣新人賞、齋藤秀雄メモリアル基金賞、渡邊暁雄音楽基金音楽賞など受賞多数。20年4月から読響の指揮者／クリエイティブ・パートナーとして多くの公演を指揮するほか、《アンサンブル・シリーズ》をプロデュースして好評を博している。九州大学客員教授。

指揮

上岡敏之

TOSHIYUKI KAMIOKA, Conductor

鬼才・上岡が
人間の内面を炙り出す



©読響

ドイツを拠点に欧州で活躍し、音楽へ愛を注ぐ孤高の芸術家・上岡敏之が、ニールセンの“戦争交響曲”に熱い思いを込める。

東京生まれ。東京芸術大学でマルティン・メルツァーに指揮を師事し、作曲、ピアノ、ヴァイオリンも並行して学ぶ。ロータリー国際奨学生としてハンブルク音楽大学に留学、クラウスペーター・ザイベルに指揮を師事。キール市立劇場ソロ・コレペティートルおよびカベルマイスターとして歌劇場でのキャリアをスタートさせた。

これまでに、ヘッセン州立歌劇場音楽総監督、北西ドイツ・フィル首席指揮者、ヴッパータール市立歌劇場音楽総監督、ザールラント州立歌劇場音楽総監督、ヴッパータール響首席指揮者、ヴッパータール市立歌劇場インテンダントなどの要職を務めた。ヴッパータール響とは二度の日本ツアーを行い、好評を博した。2016/17年シーズンからコペンハーゲン・フィル首席指揮者を務め、22年にはニールセンの交響曲第5番を振り絶賛された。ケルン放送響、バンベルク響、バイエルン放送響、シュトゥットガルト放送響などに客演。また、ザールブリュッケン音楽大学指揮科正教授も務めている。

日本では読響のほか、N響、大阪フィルなどと共演し、16年から5シーズンにわたり新日本フィルの音楽監督を務めた。ホテルオークラ音楽賞、渡邊暁雄音楽基金音楽賞・特別賞、齋藤秀雄メモリアル基金賞を受賞。

読響とは1998年以降、共演を重ね、ベートーヴェン、ブラームス、マーラーなどを指揮。またピアニストとして《読響アンサンブル・シリーズ》にもたびたび登場。

5/31
定期

Maestro

5/13

土曜マチネー

5/14

日曜マチネー

Artist



©Yuji Hori

ヴァイオリン

三浦文彰

FUMIAKI MIURA, Violin

抜群のテクニックと情熱的な演奏で、国際的に活躍する気鋭。ハノーファー国際コンクールにて史上最年少16歳で優勝。ドゥダメル、フェドセエフ、ズーカーマン、カンブルランらの指揮でベルリン・ドイツ響、ロサンゼルス・フィル、マリインスキー劇場管などと共演。NHK大河ドラマ「真田丸」テーマ曲の演奏やTBS「情熱大陸」への出演も話題を呼んだ。2018年からサントリーホールARKクラシックスのアーティスト・リーダーを務めている。21年ロイヤル・フィルのアーティスト・イン・レジデンスを務めた。22年に「フォーブス」誌の「30 Under 30 Asia (世界を変える30歳未満の30人アジア版)」に選出。CDはエイベックスよりリリース。楽器は、宗次コレクションより貸与されたストラディヴァリウス1704年製作「ヴィオッティ」。

5/19

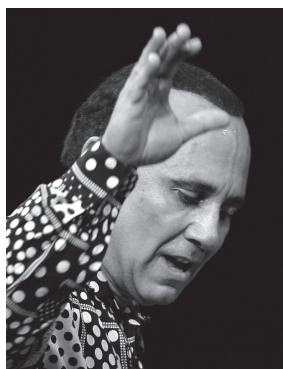
名曲

5/21

横浜マチネー

Artist

現代ジャズ界最高峰ピアニスト。自作の協奏曲を日本初演し、圧倒的なステージを繰り広げる。1954年ドミニカ共和国生まれ。幼少時からピアノを学び、79年ニューヨークに留学。マネス音楽院とジュリアード音楽院にて研鑽を積み、その比類なきテクニックとラテン・テイスト溢れるパフォーマンスで注目を集める。85年にはカーネギーホールに出演を果たし、その後ヨーロッパ・ツアーで大成功を収める。これまでにソリストとしてアトラント響、ワシントン・ナショナル響、BBC響などと共演。88年ソニーミュージックからアルバム『ミシェル・カミロ』を発売し全米ジャズ・チャート8週連続1位を記録。その後もアルバムをリリースし、いずれも高い評価を得た。グラミー賞、ラテン・グラミー賞など数多くの賞を受賞。読響初登場。



ピアノ

ミシェル・カミロ

MICHEL CAMILO, Piano



©Sunao Noto

ピアノ

エリソ・ヴィルサラーゼ

ELISSO VIRSALADZE, Piano

ロシア・ピアノリズムを現代に継承する世界的巨匠。ジョージア生まれ。モスクワへ移り、ネイガウスおよびザークに師事。20歳でチャイコフスキー国際コンクール第3位入賞を果たし、24歳でシューマン国際コンクール優勝。モーツァルト、ベートーヴェン、シューマン、ショパンなど、18世紀後期から19世紀の作品で、高い評価を得ている。旧ソ連の権威ある芸術賞を多数受賞。欧州の主要音楽都市にて定期的にリサイタルを行うほか、室内楽などでも活躍。バルシャイ、コンドラシン、サヴァリッシュ、テミルカーノフ、K. ザンデルリンク、ムーティら巨匠の指揮で世界の一流楽団と共演している。モスクワ音楽院とミュンヘン音楽大学の常任教授を務めるほか、主要な国際コンクールの審査員を務めている。読響とは2018年以来、2回目の共演。

5/31

定期

Artist

エルガー

ヴァイオリン協奏曲 口短調 作品61

5/13
土曜マチネー

5/14
日曜マチネー

Program Notes

楽器商を営む父親の下に生まれたエドワード・エルガー（1857～1934）は、父から音楽の手ほどきを受けた他はほぼ独学でヴァイオリンや作曲の技術を身に付けた。40代で〈エニグマ変奏曲〉や〈威風堂々第1番〉などの人気作を作曲しナイトにも叙されたエルガーは、1909年から翌年に書かれた本作、そしてその前後に生まれた2曲の交響曲によって英国楽壇を代表する作曲家と目され、一步步築いたキャリアも50代に入り絶頂に達するのである。

本作はシベリウスの協奏曲と並び20世紀に書かれた最もロマンティックな協奏曲と言えるだろう。3楽章構成だが、45分以上という大規模な構えを持ち、難度の高いパッセージもふんだんに盛り込まれ、エルガーらしい抒情性にほの暗さを加味したテイストも香る。

スコアには「ここに…の魂を封じ込めてある」というスペイン語が添えられている。エルガーは〈エニグマ（＝謎）変奏曲〉でも、各変奏に友人の名前の頭文字を暗号のように添えているが、本作ではエルガーの年来の友人で創作を励まし続けたアリス・ステュアート・ワートリーを意図していると言われている。

第1楽章 アレグロ 劇的な緊張感を湛えた第1主題、柔和な雰囲気第2主題を管弦楽が提示した後、独奏ヴァイオリンが満を持してテーマを歌いだす。

第2楽章 アンダンテ 素朴で温和な雰囲気が始まるが、中間部では少しテンポを速め、オクターヴの上昇で始まる新しい旋律が雄大な情景を描き出す。

第3楽章 アレグロ・モルト 独奏の走句を挟みつつ様々な素材が現れラブソニックに進む。後半はテンポを落とし、オーケストラを伴うカデンツァとなる。指の腹で弦を弾くピツィカート・トレモロ（エルガーが考案した技法）に乗って、第1楽章を回想しつつ独奏が技巧の限りを尽くしたアクロバットを披露する。

（江藤光紀 音楽評論家）

作曲：1909～10年／初演：1910年11月10日、ロンドン／演奏時間：約48分

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

5/13

土曜マチネー

5/14

日曜マチネー

Program Notes

ワーグナー

楽劇〈トリスタンとイゾルデ〉前奏曲

1848年に政治的自由を求め欧州各地でおきた民衆蜂起は、翌年にはドレスデンにも波及した。同地の宮廷歌劇場のカペルマイスターだったリヒャルト・ワーグナー（1813～83）はその理念に共感し革命に身を投じるが、蜂起は鎮圧され自身も指名手配者となり、スイス・チューリヒでの長い蟄居^{ちつきよ}生活を余儀なくされる。ここでワーグナーは一連の著作や楽劇の創作に取り組んでいく。

1853年、ある演奏会の指揮後、一人の女性がワーグナーを訪ねてくる。彼女は織物で財を成した商人オットー・ヴェーゼンドンクの妻マティルデで、芸術にも理解が深かった。オットーは経済的に困っていたワーグナーに自宅の隣家を安価で貸し、やがてワーグナーとマティルデの間に親しい交流が始まる。

ワーグナーはこの時、作曲中だった〈ジークフリート〉の筆をいったん止め、ケルトの民間伝説に取材した楽劇〈トリスタンとイゾルデ〉や、マティルデの詩に基づく〈ヴェーゼンドンク歌曲集〉に取り組んでいる。叔父であるマルケ王の妻イゾルデと媚薬によって恋に落ちてしまうトリスタンの悲劇は、マティルデへの恋愛感情の高まりという形でワーグナー自身を刺激していったように見える。これはスキャンダルになり、結局ワーグナーがチューリヒを去りヴェネツィア旅行にでる形で収まるが、〈トリスタンとイゾルデ〉の創作、とりわけ無限の高みをめざすかのような音楽の展開が、この恋愛の高揚感からインスピレーションと活力を得ていることは疑いないだろう。

第1幕への「前奏曲」にはそのエッセンスが凝縮されている。チェロの静かな歌いだしに次いで現れる和音は、それまでの和声学では説明のつかない音程関係からなる。不安定な旋律は反復されながら無重力空間を泳ぐように上昇し、やがて大河のようにたっぷりとしたサウンドで愛の歓びを表現する。

「前奏曲」の後にはオペラの結尾部にあたる「愛と死」を続けて上演することが多いが、今回は代わりにR. シュトラウスの〈死と変容〉が演奏される。

〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲：1854～59年（楽劇全曲）／初演：1865年6月10日、ミュンヘン宮廷歌劇場／演奏時間：約12分
楽器編成／フルート3、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット3、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部

R. シュトラウス

交響詩〈死と変容〉 作品24

リヒャルト・シュトラウス（1864～1949）はミュンヘン宮廷歌劇場のホルン奏者を父に持ち、音楽上の方向性も当初はワーグナーにはじまる新ドイツ楽派やその標題性を好まなかった父の影響を受けていた。それが変わったのは指揮者として赴任したマイニンゲンで知り合ったヴァイオリニスト、アレクサンダー・リッターとの交流によるところが大きかった。ワーグナー家とも親交のあったリッターは、当時、楽壇を席卷していた新音楽の魅力にシュトラウスを開眼させたのだった。

〈死と変容〉はミュンヘンの宮廷歌劇場指揮者時代の1888年に構想が始まり、ワイマールの宮廷歌劇場の指揮者に転出後、当地で完成された。〈マクベス〉や〈ドン・ファン〉といった先行する交響詩の創作によってオーケストラの扱いを手の内に収めていったことは、初演前に大先輩指揮者ハンス・フォン・ビューローから絶賛を受けていたことからわかる。

スコアの扉には曲のイメージを表した短い詩が添えられている。病床にある芸術家が襲ってくる死と激しく闘う。つかの間の安らぎの中で、その脳裏には崇高な目的に向かって創作に励んだ日々が浮かんでくる。死は彼に容赦なく最後の鉄槌を下し、彼の魂は浄化（“変容” Verklärungは“浄化”とも訳される）され天に昇っていく、というものだ。この内容はシュトラウス自身が作曲にあたって抱いていたイメージをリッターに伝え、リッターが詩へと膨らませたものである。

弱った芸術家の心臓の鼓動や時計の音を思わせるリズム主題が提示された後、ハーブのアルペジオに乗ってフルートに可憐な主題が現れる。アレグロ・モルト・アジタートに入ると一転し低弦の突き上げるような音型が不穏さを呼び寄せ、主要動機を出しつつ激しく高まっていく。夢幻の境地、闘争的な激しさとその後の安寧という構成はリッターの詩をなぞりつつ、大きなソナタ形式をなしてもいる。

〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲：1888～89年／初演：1890年6月21日、アイゼナハ／演奏時間：約23分
楽器編成／フルート3、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（銅鑼）、ハープ2、弦五部

5/13

土曜マチネー

5/14

日曜マチネー

Program Notes

5/19
名曲5/21
横浜マチネー

Program Notes

モーツァルト

歌劇〈ドン・ジョヴァンニ〉序曲

イタリア語で呼べばドン・ジョヴァンニ、スペイン語で呼べばドン・ファン。曲名はプレイボーイの代名詞ともなったスペインの伝説の好色家のことを指している。希代の女たらしドン・ジョヴァンニは貴族の娘を誘惑し、その父親である騎士長を殺す。騎士長は石像の姿でよみがえり、ドン・ジョヴァンニの晩餐^{ばんさん}にやってきて改^{かい}悛^{しゅん}を迫る。これを断固として拒むドン・ジョヴァンニは、地獄へと落ちる……。あらずじけを追えば、喜劇にも悲劇にもなりそうな題材である。そして、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～91）のオペラ〈ドン・ジョヴァンニ〉にも喜劇的な要素と悲劇的な要素が混然一体となっている。

前作〈フィガロの結婚〉がプラハでセンセーショナルな成功を収めたことから、モーツァルトはプラハの興行主より新作オペラを依頼される。台本は前作同様ダ・ポンテ。本人の回想によれば、ドン・ファン伝説を選んだのはダ・ポンテだ。

作品の完成が遅れたことから、当初10月14日に予定されていた初演は29日に延期された。本番2日前になっても序曲はまだできあがっていないという慌ただしさだったが、モーツァルト自身の指揮による初演は大成功を収めた。

序曲は悲劇的な序奏で開始される。これは騎士長の石像がドン・ジョヴァンニの招きに応じて晩餐に現れる場面の音楽。次第に緊迫感を高めるが、主部では一転して陽気で軽快な音楽がくりひろげられる。陰と陽のくっきりとした対比は、そのままオペラ全体の性格を予告している。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1787年／初演：1787年10月29日、プラハ、国立劇場／演奏時間：約7分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

カミロ

ピアノ協奏曲 第2番〈テネリフェ〉（アウディトリオ・デ・テネリフェ委嘱／日本初演）

ドミニカ共和国出身のミシェル・カミロ（1954～）は、母国の音楽院で学んだ後、1979年にニューヨークに渡り、マネス音楽院やジュリアード音楽院で研鑽を積み、ジャズ・ピアニストとして人気を博し、作曲家としてもジャンルを超えた活躍を繰り広げている。90年にラベック姉妹をフィーチャーした新曲の作曲を委嘱されたカミロは、2台のピアノと管弦楽のためのラプソディを完成。ラベック姉妹を通じて、カミロに関心を抱いたレナード・スラットキンの勧めで作曲したピアノ協奏曲（第1番）は、98年にワシントンD.C.で初演され、2001年にスラットキン指揮BBC響と録音したディスク（英デッカ・レコード）は大好評を博した。

ピアノ協奏曲第2番〈テネリフェ〉は、保養地として著名なカナリア諸島の中で最大の島であるテネリフェ島のアウディトリオ・デ・テネリフェの委嘱作として、2009年3月13日に初演された作品である。前作のピアノ協奏曲（第1番）と同様に伝統的な3楽章構成を採り、カミロ自身がソロ・パートを弾くことを前提として、情熱的なリズムと魅力的なメロディーが用いられている。カミロ自身は、「私にとって特別な場所であり、訪問するたびに忘れ難い数々の思い出を与えてくれるテネリフェ島に捧げる作品」であり、「人々のあたたかさ、コントラストに富んだ鮮やかな光、つねに感じてきた色彩など、テネリフェ島が備えている大いなる威厳」について作曲することを意図したと記している。

書法的には、全3楽章を通じて、ピアノ・ソロとオーケストラの双方が、数多くの意欲的なチャレンジを通じて合意点を見出したり、協調したりしながら、協奏曲的なキャラクターを形づくっていく。以下、作曲家本人の解説を参考にしながら、各楽章のアウトラインを辿っていくことにしたい。

第1楽章「マエストーソ、アレグロ・デチーソ、モデラート、ヴィヴァーチェ、マエストーソ、ヴィーヴォ」は、テネリフェ島のテイデ火山（標高3718m）を訪れた際にインスピレーションを受けた音楽で、それぞれ「マエストーソ」（荘厳に）の序奏が付いた2つのセクションで構成されている。**第1部**は、チェロとコントラバスによって囁くようにメロディーが提示され、オーケストラによる対位法的な動きを経て、角張ったリズムによる「アレグロ・デチーソ」（決然としたアレグロ）に入っていく。

5/19
名曲5/21
横浜マチネー

Program Notes

5/19
名曲5/21
横浜マチネー

Program Notes

続く「モデラート」では、ピアノ・ソロが、より歌謡的な性格を備えた第2の主題を奏し、オーケストラのトゥッティを経て、既出の主題が絡み合いながら、ピアノとオーケストラが互いに競り合ったり、協調したりしながら進んでいく。第2部の「マエストロ」は、第1部よりも深く激しい曲調を備え、カミロがティデ火山に抱いているイメージが追求されている。ピアノ・ソロによる華やかなアルペジオや技巧的なオクターヴを活用するなど、カミロが備えているテクニックが惜しげもなく盛り込まれている。第2部のラストを飾る「ヴィーヴォ」（活発に）は、遊び心に満ち、さらにテンポを速めてクライマックスを築き上げ、楽章の結尾部には、既出の主題を回想する穏やかなエピローグが配され、静かに閉じられる。

第2楽章「ラルゴ」は、音を十分に保った美しいカンタービレが支配的であるが、ジャズの要素も含めて、ニュアンスとハーモニーが鮮やかに対比されている。ピアノ・ソロとチェロによる切々とした心情があふれ出すデュオに対して、オーケストラの全合奏によって熱い思いが解放されていく。

第3楽章「アレグロ・アラ・ダンツァ」は、ダンスのリズムにスポットがあたり、打楽器アンサンブルが大活躍。自由なロンド形式を採り、祝祭的な精神に満たされ、複数のリズムや拍子が同時進行するポリリズムが活用されている。第1楽章の主題が回帰する一方で、エキゾチックで官能的なメロディーも出現。ピアノ・ソロが大活躍し、弦楽器とティンパニによるオスティナート・リズムを伴いながら、エキサイティングなフィナーレへと突き進んでいく。

〈満津岡信育 音楽評論家〉

作曲：2008年／初演：2009年3月13日、カナリア諸島のテネリフェ島／演奏時間：約27分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、中太鼓、ピッコロスネアドラム、トムトム、シンバル、サスペンデッド・シンバル、ハイハット・シンバル、フィンガー・シンバル、トライアングル、タンブリン、ベルツリー、マークツリー、ゴング、クロテイル）、弦五部、独奏ピアノ

モーツァルト

交響曲 第28番 ハ長調 K.200

「不安に耐えられない人はサラリーマンをする。不満に耐えられない人は自営業をする」という名言がある。故郷ザルツブルクの宮廷楽団における勤め人だったヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～91）は後者のタイプだった。職場環境の不満に耐えられず、かといって新たな就職先も見つからず、結局はウィーンに飛び出して、自らの才覚で独立した音楽家として成功を収めた。

モーツァルトが交響曲第28番を作曲したのは、まだザルツブルクで雌伏^{しふく}していた頃。求職を目的に旅から旅への暮らしを送っていたモーツァルトだが、1773年のウィーン旅行から帰郷すると、次の旅まで1年2か月にわたってザルツブルクに留まることになる。モーツァルトが故郷の職場について残した言葉は辛辣^{しんらつ}だ。「粗野でやくざならしめない宮廷楽団」「ザルツブルクのオーケストラは役立たずの連中でいっぱい」等、不満は尽きない。

そんなストレスフルな環境であれば創作活動も停滞したにちがいない……と思いたくなるが実態は逆だ。この期間にモーツァルトは9曲もの交響曲を書いており、そこには交響曲第25番短調や第29番イ長調といった名高い作品も含まれている。そして一連の交響曲で最後に書かれたと思われるのが第28番^{きた}。来るべき飛躍に向けて己の才能を磨き上げる若者の姿が、清新な曲想から伝わってくる。

第1楽章 アレグロ・スピリトーソ 呼びかけのような強奏で開始される。トリルを伴う装飾的な主題は、終楽章とも共通した性格を持つ。

第2楽章 アンダンテ セレナーデ風。木の葉が舞い落ちるような動機が特徴的。

第3楽章 メヌエット、アレグレット 最後の交響曲〈ジュピター〉のメヌエットを連想させる。弦楽器のみによるトリオはチャーミング。

第4楽章 プレスト 早口のおしゃべり風の陽気で軽快なフィナーレ。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1774年／初演：不明／演奏時間：約23分
楽器編成／オーボエ2、ホルン2、トランペット2、弦五部

5/19
名曲5/21
横浜マチネー

Program Notes

5/19
名曲

5/21
横浜マチネー

Program Notes

ラヴェル ボレロ

モーリス・ラヴェル(1875～1937)と親交を結んだ女性に、ロシア出身のバレエ・ダンサーのイダ・ルビンシテインがいる。裕福な家庭に生まれ、恋多き女性でもあった彼女は、ラヴェルに対して常に親身になって接していたという。ルビンシテインはラヴェルにスペイン風のバレエ音楽を書いてほしいと依頼した。当初、ラヴェルはかねてより高く評価していたアルベニス作曲のピアノ曲〈イベリア〉をオーケストレーションするつもりだった。

しかし編曲の権利にまつわる問題から、ラヴェルは〈イベリア〉のオーケストレーションをあきらめ、バレエ初演の3週間前になって、新たにオリジナルの作品を書くことを決心する。今さら新しい曲を書けるものか、と動転するルビンシテインに対して、ラヴェルは時間がないのだから「ごく単純な譜面を考えるほかない」として、この〈ボレロ〉を書きあげた。

曲は基本パターンの反復と、全曲を通した大きなクレッシェンドによって構成される。冒頭で小太鼓がボレロのリズムを刻み、このリズムが延々と続く。そこに作曲者が「没个性的で、お決まりのスペイン＝アラブ風」と呼ぶエキゾチックな主題が登場する。この主題が次々と楽器を替えて奏でられる。まずはフルートで。次はクラリネットで、さらにファゴットで、エス・クラリネットで、オーボエ・ダモーレで、フルートとトランペットの組合せで……。同じリズムと同じメロディがひたすら繰り返される。珍しいトロンボーンのソロなど、腕利き奏者たちのソロ自慢の様相を呈しながらも、さまざまな楽器の組合せがカラフルな響きを作り出す。クレッシェンドが頂点に達すると、突然、滝が流れ落ちるように曲を閉じる。ラヴェルによれば「オーケストラの扱いは簡素かつ明快で、名人芸を目指したところは微塵^{みじん}もありません」。はたして本心からそう思っていたのだろうか。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1928年／初演：1928年11月22日、パリ／演奏時間：約13分

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、ピッコロ、オーボエ2（オーボエ・ダモーレ持替）、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、エスクラリネット、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ソプラノサクソフォン、テナーサクソフォン、ホルン4、ピッコロトランペット、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、サスペンデッド・シンバル、銅鑼）、ハープ、チェレスタ、弦五部

シベリウス

交響詩〈エン・サガ〉 作品9

ジャン・シベリウス(1865~1957)は1889年にベルリン、その翌年にはウィーンに留学した。厳しい授業を受けたり演奏会を見聞きたりと、音楽の修行を積むが、それ以上に入れ込んだのは“酒と金づかいの訓練”だった。ベルリンで放蕩三昧をし、ウィーンでサロンに入り浸ることでシベリウスは、財布の中身と釣り合いの取れない貴族趣味を身に付け、ひどく困窮する。興味深いのは、こうした実生活のありさまが必ずしも、創作世界に浸透しているわけではないという点だ。事実、この時期の作曲家の着想には目を見張るものがある。

まず重要なのは、交響詩〈クレルヴォ〉のアイデアを思いついたこと。このアイデアを故郷に持ち帰り、曲としてまとめた。1892年の初演は大成功。シベリウスは一夜にしてフィンランド楽壇の寵児となった。次に注目したいのが、交響詩〈エン・サガ〉への取り組み。ウィーンで見たベックリンの絵画が数年を経て、この作品のインスピレーションの源となった。〈クレルヴォ〉の成功で世間体を整えた作曲家は92年初夏、かねて交際するアイノと結婚し、新婚旅行に出かける。このハネムーン中に交響詩〈エン・サガ〉を書き上げた。指揮者カヤヌスを通して、ヘルシンキ・フィルから依頼があったことが直接の契機だが、ウィーン時代のアートとの触れ合い、妻アイノとの交歓の日々こそが、作曲家をこの作品に向かわせたと言える。

タイトルはスウェーデン語で「ある伝説」を意味する。曲にはさまざまな楽想が現れるが、それぞれ同じモチーフを繰り返しながら“生地の織り模様”を変化させる、という特徴を共有する。とくに、弦楽器群を細かくパート分けして、手触りを精巧に移ろわせる手腕には、後年の大作作曲家の片鱗があらわれている。民謡風のつまずくようなリズムが、形を変え随所に現れる。初演時に批判的にもなったが、この作品の魅力のひとつである。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1892年(1902年改訂)／初演：1893年2月16日、ヘルシンキ(初稿)、1902年11月3日、ヘルシンキ(改訂稿)／演奏時間：約20分
楽器編成／フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、打楽器(大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル)、弦五部

シューマン

ピアノ協奏曲 イ短調 作品54

ドイツ中部ライプツィヒは音楽の街だ。ロベルト・シューマン(1810~56)が同地で過ごした時期には市立歌劇場も整備され、中世から続く聖歌隊、世界最古の民間管弦楽団、オペラハウスが街の生活を彩っていた。シューマンはそこに音楽ジャーナリズムの種を蒔く。雑誌「音楽新報」を創刊し、盛んに批評を発表した。

こうした豊かな音楽環境の中から生まれてきたのが、ピアノ協奏曲イ短調である。ライプツィヒ期の1841年に、ピアノと管弦楽のための〈幻想曲〉を作曲。同年、手直しをしてゲヴァントハウスで試演した。43年にも改訂の手を加え、45年、移住先のドレスデンで3楽章制の協奏曲に仕立てる。同年12月に改めて“試し打ち”をし、翌年、ゲヴァントハウスで初演した。

シューマンらしさがあらわれているのはこの創作過程だ。作曲、改訂、試演、再改訂、再試演、最終確認、初演。これだけの行程を踏めるのは、シューマンの周囲にある音楽資源が豊かだったから。作曲家としては慎重過ぎるかもしれないが、彼が演奏の現場に重きを置いていたことがよく分かる。現場では作曲家から批評家へと立場を変え、自作を評価する。この曲は批評家でもあったシューマンの耳によって磨かれている。

第1楽章 オーケストラの強奏一閃、ピアノが短長リズムで階段を力強く下りる。それに応じてオーボエが「C(ハ)－H(口)－A(イ)－A」の主題を奏でる。これは作曲家の妻クララを示している。この主題が作品全体を貫く。

第2楽章 間奏曲。次楽章へのブリッジ部が重要だ。第1楽章のクララ主題を回想、第3楽章の主題を先取りしたのち、切れ目なく終楽章に入る。

第3楽章 快速のロンド。ヘミオラ(小さい3拍子2小節を大きい3拍子1小節として数える変拍子)によるギアチェンジが楽しい。最終段、ピアノが切迫したアルペジオで周囲を巻き込みながら終結にいたる。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1841、45年／初演：1846年1月1日、ライプツィヒ／演奏時間：約31分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

ニールセン

交響曲 第5番 作品50

カール・ニールセン (1865～1931) は1921年から22年にかけて、交響曲第5番に取り組んだ。このころまでに作曲家は、王立劇場楽長、コペンハーゲン音楽院理事、同音楽院作曲教授を歴任し、デンマーク音楽界になくてはならない存在となっていた。

7番目の子供として貧しい家庭に生まれ、10代の前半には商家に^{でっち}上があった。音楽好きだった父親からコルネットを習い、軍楽隊に入ったのが1879年。そこから猛烈な勢いで音楽の勉強を始める。ピアノも音楽理論も独学だ。やがて篤志家の目に止まり、1884年に資金援助によりコペンハーゲン音楽院へ。突出して優秀な学生というわけではなかったが、それだけにいっそう努力を惜しなかった。

89年、王立劇場の管弦楽団に、第2ヴァイオリン奏者として入団。翌年には奨学金を得てドイツに留学する。ブラームスのスタイルを吸収して故郷に戻り、自らの創作にそれを活かしていく。1901年には早くも国家年金が支給されるようになり、以後、デンマークに必要な音楽家として遇される。同時期にいささかだらしのない生活を送っていたシベリウスとは正反対。じつに堅実な音楽家人生だ。

ニールセンは20歳代半ばから交響曲の創作を始めた。第1番こそブラームスの影響下にあるが、それ以降は、中世以来の人間の性質を描く第2番〈四つの気質〉、(歌詞のない) 声楽付きシンフォニーである第3番〈広がりの交響曲〉と、独自の歩みを進める。

第4番〈消しがたきもの (不滅)〉は独奏ティンパニ群を擁する編成、古い様式の活用、哲学の援用、戦争の暗示などで交響曲史に名を刻む。しかし、真に重要なのはその後の第5番 (1921～22年) と第6番 (1924～25年) である。

透明感のあるオーケストレーション、調の有無を自在に行きつ戻りつする音感覚、弦楽群・木管群の共同作業の繊細さと、金管群・打楽器群の軍楽隊的な緊張感との対比。ミニマルミュージックにもつながるような無機質な反復とそのポリフォニックな処理。これらは以後、ヨーロッパ、とりわけ北欧とイギリスで受け入れられ、その地の交響曲作家の規範となった。

そのうち第5番は、ニールセンの交響曲の中でもいくぶん変わった体裁をとる。

習作とも言える第1番と、この第5番だけが副題を持たない。他はすべて4楽章制だが、この曲だけは2楽章制をとる。その2楽章制とて、一筋縄ではいかない構造をしている。

作品は上述の通り、二つの楽章からなるが、それぞれの楽章もまた細分化できる。第1楽章は2部分、第2楽章は4部分からなるのだ。つまり全体は、テンポの異なる6つの部分の集成となっている。しかも、第2楽章の4つの部分は、循環形式 (共通する主題を各部で共有することで曲の統一感を高める工夫) によって、あたかも4楽章交響曲のように響く。

先ほど述べた数々の音楽的特徴と上記の楽章構成とをあわせ見ると、ニールセンが交響曲の造りに関して、かなり独自の視点を有していたことが分かる。第5番はシンフォニーの歴史を画するきわめて重要な作品である。

第1楽章 ヴィオラの脈動に木管群が呼応していく。弦楽群が合流して脈動に強弱が生まれる。小太鼓がその脈動を受け取り「長短短短長長」のリズムで定式化する。木管群の伸びやかなメロディーなどを経て、オーボエの下行音型を合図に、明るい楽想の第2部分「アダージョ」に入る。繊細なオーケストレーションで“湿度”を変化させたのち、小太鼓の脈動を回想。頂点を迎えた音楽は、その脈動とともに消える。

第2楽章 石段をひと足に飛び降りるような、2音の跳躍下行音程が耳を引く。これが楽章全体を束ねる循環主題。四分・八分・三連八分音符と基本音価を変化させ、エネルギーの推移を無窮動の形で示す。フーガ風の第2部分を経て、第3部分ではパート間で下行音型を受け渡し、それを執拗に繰り返す。第4部分はそのエネルギーを (下行音型は保ったまま全体のベクトルとしては) 上行に転換し、一気呵成に曲を終える。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1921～22年／初演：1922年1月24日、コペンハーゲン／演奏時間：約34分

楽器編成／フルート3 (ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器 (小太鼓、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、タンブリン)、チェレスタ、弦五部